教科担任部会　研究のまとめ

①「教師の得意分野を生かした授業を行い，児童の学習意欲を喚起し持続させる」ことに関して

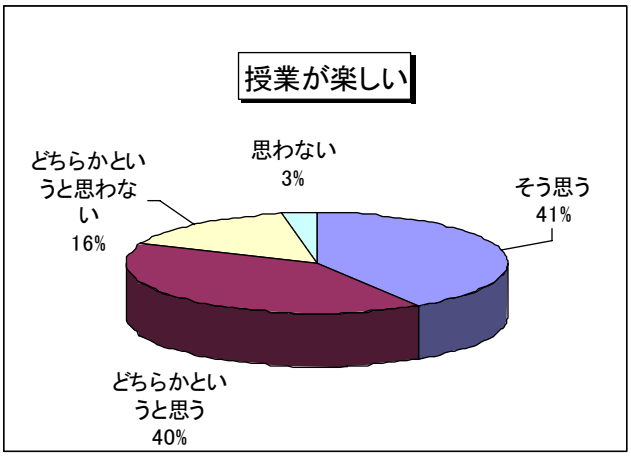
教科担任制により教科を分担することで，次のようなメリットが生まれ，それが学習意欲を高める要因になっている。

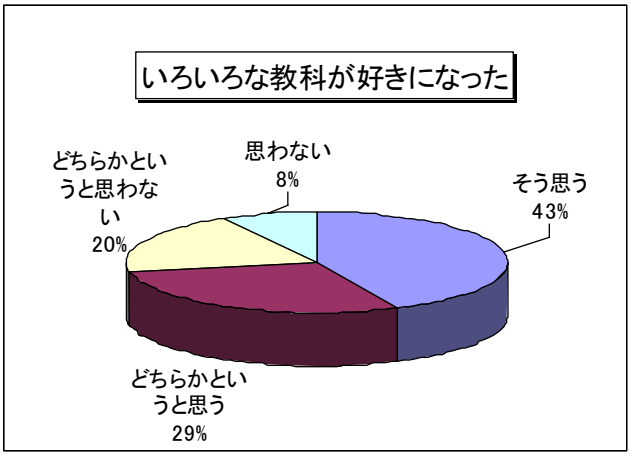
・指導する教科が少なくなることから，教材研究に時間をかけることができた。その結果，従来よりも準備がよくできた状態で授業を行うことができた。特に，理科や図工，家庭科では，事前の準備や予備実験・試作などが重要であり，その時間が確保されるという良さがあった。また，他教科においても，指導のための情報収集や教材開発ができ，児童のノートや作品に目を通すこともこれまでよりもできるようになった。

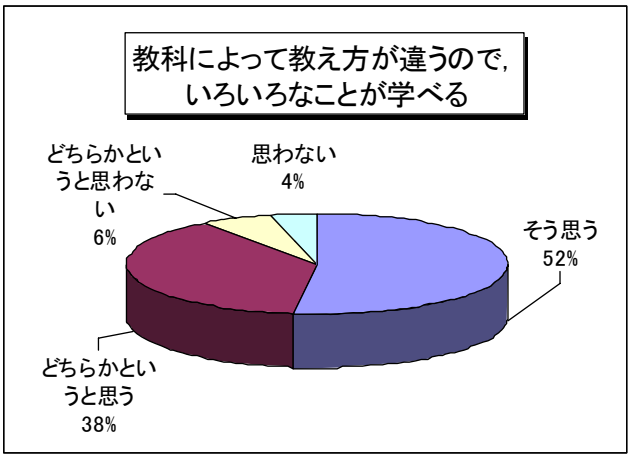
・他の学級の考えやアイディアを紹介することで，授業を活性化させたり，良い刺激を与えたりすることができた。

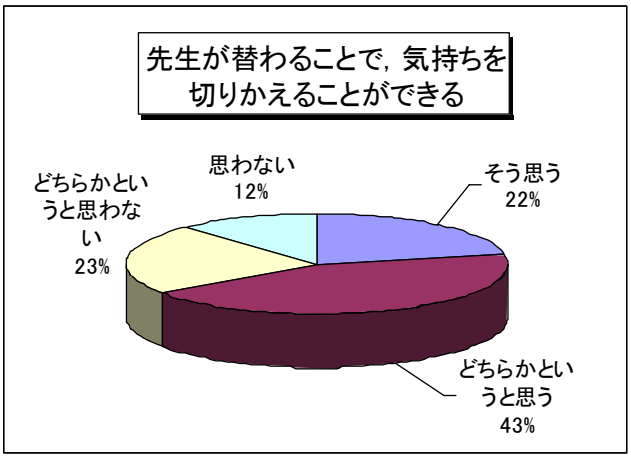
・教科担任制では，教科ごとに担当者が替わることにより，児童が適度な緊張感を保ちながら学習することができた。

【児童の意識調査より一部抜粋　　対象：６学年児童１３０名　１２月実施分】



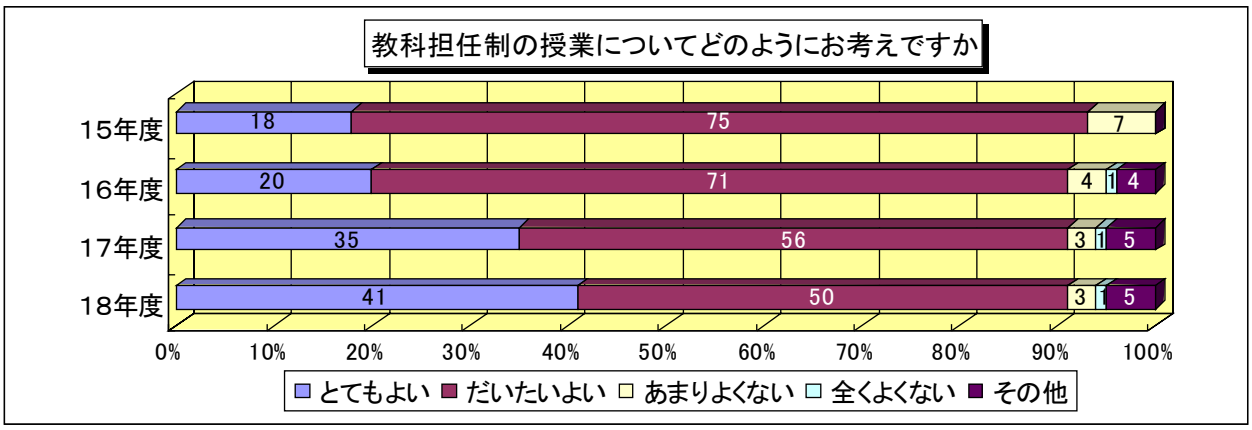






「授業が楽しいか」を問う設問では，８１％の児童が教科担任制による授業を，楽しいと肯定的にとらえていた。「いろいろな教科が好きになったか」を問う設問では，７２％が好きになったと答えている。このことから，教科担任による授業で児童の学習意欲が高まっていると考えることができる。また，「教科によって教え方が違うので，いろいろなことが学べる」では，９０％の児童が，「先生が替わることで，気持ちを切り替えることができる」では，６５％の児童が肯定していた。多くの教師に指導されるメリットを，実感している児童が多いことが分かる。

【保護者に対するアンケート調査より一部抜粋　１５年度～１８年度】

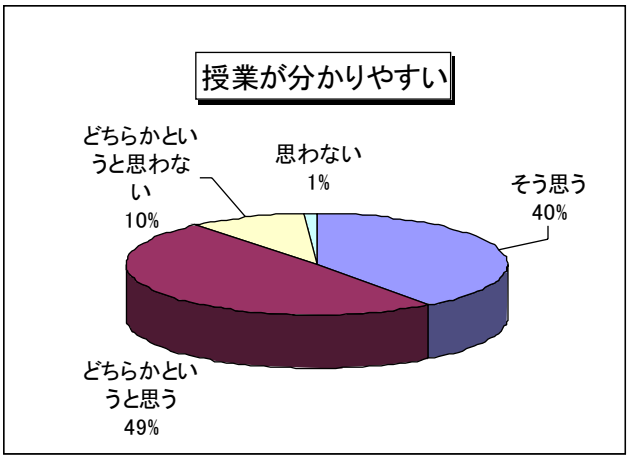


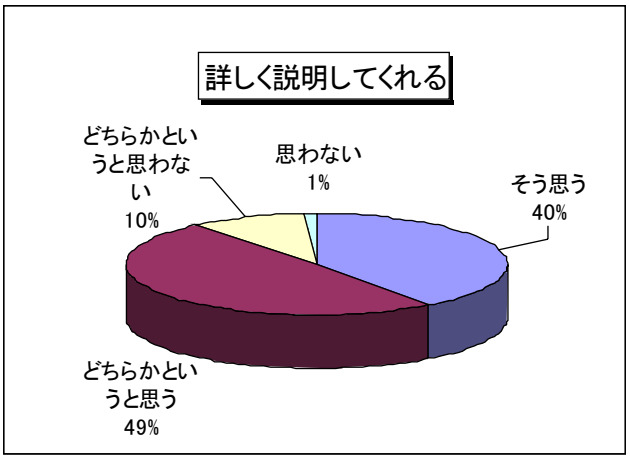
教科担任制を導入した１５年度から，保護者に対するアンケート調査を実施している。これによると，１５年度から一貫して，９０％を超える保護者が教科担任制の授業を肯定的にとらえていることが分かる。また，年々「とてもよい」の回答が増えてきており，保護者の中でも教科担任制が定着してきたと考えられる。「とてもよい」「だいたいよい」の理由として，「子供たちが興味を持てるような授業をしてくれる」「授業の資料が多く，内容が充実しているように思う」「先生の得意とする科目を教えてもらえることはよいことだと思う」などの声が寄せられている。

②「教師の指導力のスキルアップを図る」ことに関して

- 教科担任制により同じ学習内容を複数回指導できるので，授業展開を修正したり発問を吟味したりするなど，教材研究が深まった。
- 同じ学習内容を指導するにしても，学級ごとの実態が違うため，同じ授業をそのまま行うことはできない。学級ごとの理解度や学習に対する姿勢の違いを把握した上で，指導する必要があり，こうした柔軟性は指導力の向上につながっていると思われる。
- 複数の学級で指導を行うので，評価規準をもとに，より適切で客観的な評価が出せるようになった。

【児童の意識調査より一部抜粋　　対象：６学年児童１３０名　１２月実施分】





「授業が分かりやすい」と「詳しく説明してくれる」という授業の評価に関する設問では，いずれも８９％の児童が「そう思う」「どちらかというと思う」を選択しており，指導力の向上に向けてそれぞれの教師が取り組んでいることが，肯定的に受け止められていることが分かる。授業の分かりやすさについては，昨年度までの６学年児童についても，９０％以上が「よく分かる」や「分かる」を選択しており，同様な傾向を示している。

③「児童一人一人を多面的にとらえ，よさや可能性を引き出す」ことに関して

教科担任制を通して，多くの教師が児童と関わり合うことで，学習面のみならず生徒指導においてもよい効果が見られている。

・多くの教師が児童と関わり合うと，学級担任には気づかない良さを発見できることが多い。担任とは違う視点から児童の良い点を見ることができ，それを伝え合うことで，その子の長所を知ったり高めたりすることができる。また，担任にとっては，児童理解の力を向上させることにもつながっている。

・高学年児童は，交友関係で学級を超えた関わり合いを持つことが多くなってくる。学級担任は，教科担当として他の学級の児童の様子も把握できるので，そうした学級外の関わり合いにも対応しやすくなっている。

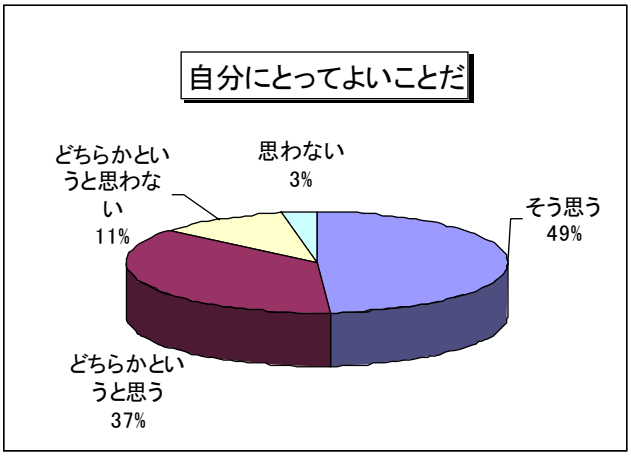
・教科担任制で多くの教師が学年全体の児童の様子を知ることで，学級担任の悩みを具体的に共有したり，同一歩調で直接指導したりすることができた。児童には，学級担任の他に「学年の先生」としても接することができた。

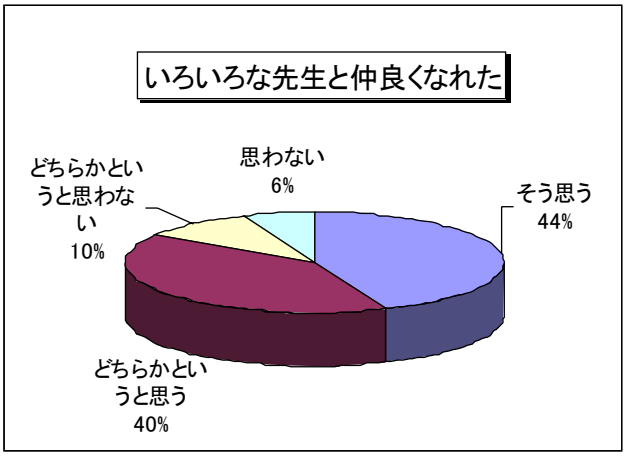
・どの教師も児童の様子が分かり全体の雰囲気がつかめるということは，学年で動く学校行事や総合的な学習の時間での児童との関わり合いに役立った。

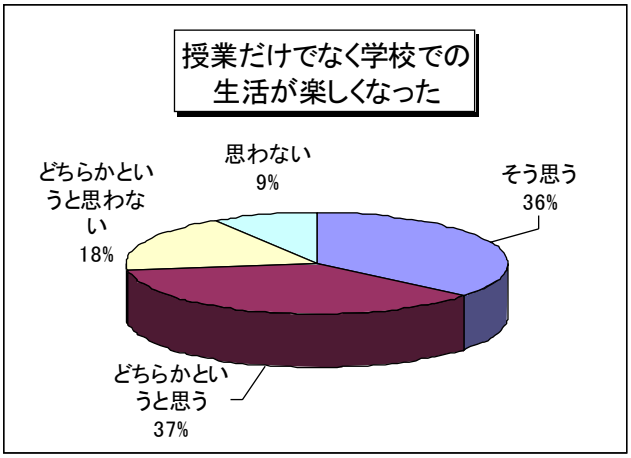
・いつでも，どこでも気軽に児童の様子を話せる学年の雰囲気が，児童を理解し共通した指導を行う上で，非常に大切な要素になった。

・学級担任がいないところで問題が生じた時に，タイムリーな指導ができないのではないかという心配があった。しかし，実際にはその場にいた教師が指導し，情報伝達・交換を密にしていたので，特に問題にはならなかった。

【児童の意識調査より一部抜粋　　対象：６学年児童１３０名　１２月実施分】







学習面以外に関する意識調査の項目である。いずれも７０～８０％以上の高い数値で肯定的にとらえられている。

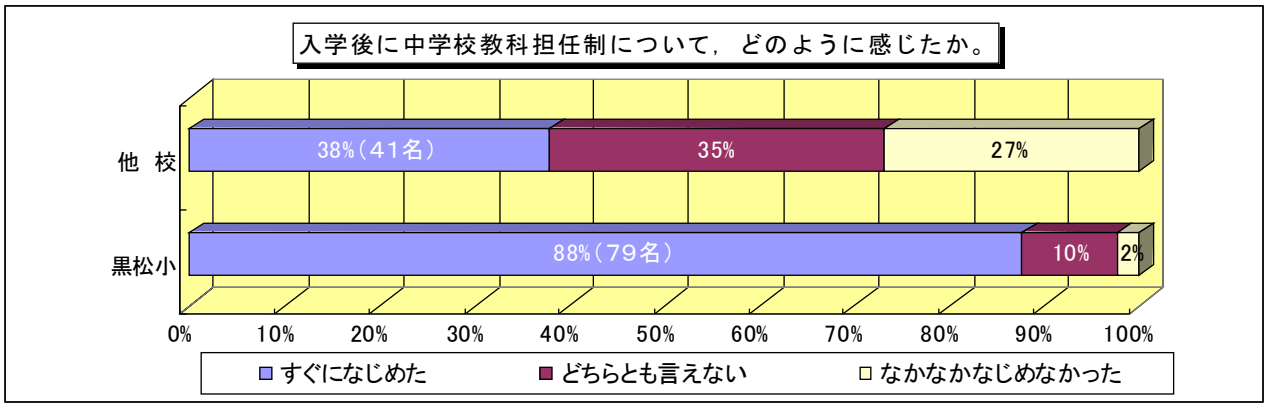
教科担任制による教師との関わりが，自分にとって良いことだと感じている児童が８６％と非常に高い割合を示している。いろいろな先生と仲良くなれたと感じている児童も８４％と高い。また，一概に教科担任制によるものとは言い難いが，学校での生活が楽しくなったと，プラス思考で考える児童が７３％となっている。このことから，教科担任制を通して，いろいろな教師と触れ合える良さを，多くの児童が感じ取っていることが分かる。

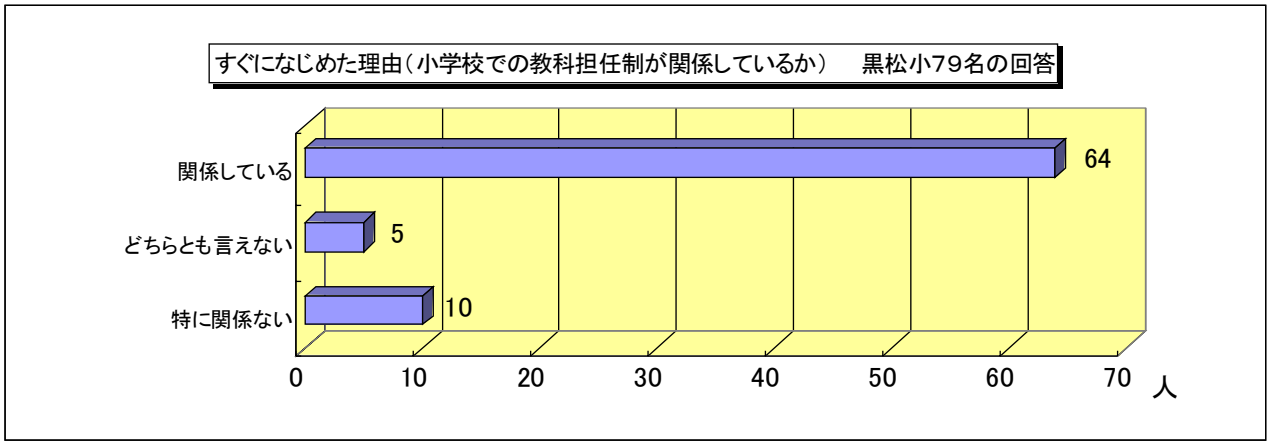
④「中学校へのスムーズな移行を図る」ことに関して

中学校進学に際して，児童の多くは期待とともに少なからず不安を持っている。学習が難しくなることや部活動，先輩・後輩の関係を含めた新しい交友関係など，環境が大きく変化することに対する不安である。本校の教科担任制は，副次的に中学校入学後に適応を容易にする効果もねらいの一つにしているが，中学１年生に対する追跡調査の結果を見ると，小学校で教科担任制の授業の経験がある生徒の方が未経験の生徒よりも，中学校の教科担任制に適応しやすいことが分かった。

このことから，中学校入学当初に多少なりとも不安を抱く生徒にとって，小学校時代に担任以外の教師と数多くふれ合う経験をすることは，不安を軽減させ中学校生活にスムーズに移行させる上で有効であると言える。

【中学１年生に対するアンケート調査より　対象：黒松小卒業９０名，他校卒業１０８名　９月実施】





「入学後に中学校教科担任制についてどのように感じたか」の設問では，本校出身の中学１年生の８８％（７９名）が，「すぐになじめた」と回答している。他校出身の生徒が３８％（４１名）に比べると，かなり高い数値になっている。また，「すぐになじめた」と回答した７９名のうち，すぐになじめた理由として，小学校の教科担任制が関係していると答えた生徒が６４名もいた。過去３年間に渡って中学１年生に対する追跡調査を実施しているが，１６・１７年度の中学１年生についても同様な傾向を示している。このことから，小学校での教科担任制の経験は，中学校教科担任制への適応を容易にし，環境の大きな変化に対する不安の緩和につながっていると考えられる。